

「育ての心」の再発見



森 田 一

一、雑草ともやし

教育といい、しつけといい、いつの世においてもその根本は育つもののいのちを尊重し、その心を知り、育てるものが己が心を正すこと、その両者のいのちといのちの出会いどころになければならない。それは、大河の流れのように、尽きず渴れず、流れ絶えざるものである。その大きな流れの中から、おのづから時代により国により、また家庭や教育の場に応じて、具体的に必要な方法が生まれてくるのである。

ところが、この当り前な根本のことが忘れられ、育児教育があまりに目先の技術にはしり、親や教師がテクニシャンになってしまっている。そのため、いかにつくられた問題児が輩出していることとか。さまざまな臨床の事例は、そのことを実証している。

A君はそのもやし型の典型的の少年である。経済的には裕福な家庭で大事にされて育った。幼い時から何不自由なく、欲しまっていいものは何でも満たされ、かなりわがままに育った。小学校時代、学校の成績は普通だが体育がダメで走ることは遅く、バネ力

がなく、体は大きくむしろ肥満しているのに、腕や脚の力が弱い。家庭教師も入れ替わりつけているようだが、必ずしも成績は上がらない。我慢して物事をやる習慣がなく、身勝手なことがそのまま家庭で通り、むしろ親が何事によらずかばってしまう。

「それころぶそれ危なし」という親の過ぎたる護り子らをそこなう」というしつけのいろは歌の通りである。私立中学二年の夏頃から生活が乱れ、友だちと遊び歩き、学校は怠ける、家財の持ち出し、徹夜マージャン、かけごとなどと進行していく。幼いときから子ども第一主義に甘やかして育てた習慣から、両親とも強く叱ることをせず、たまに父親が思いあまって注意などすると、カッと頭へきて当たりちらす仕末。母親はただおろおろするばかりである。専門的な性格検査によれば、衝動の抑制力が弱く、自己中心的で、みせかけが多く、気分が変わりやすい。意志力や忍耐力がなく、根気とか持久力がない。典型的な非行少年の性格である。それはまた生活史を通じてみると、この頃の物に恵まれた家庭に非常によくある幼少時以来の性格形成の結果でもある。

A君の母親は、審判廷で苦渋に満ちた表情で言つた。「うちの子は子どものときから、何不自由なくさせ、欲しいものは何でも与えておりましたのに、どうしてこんなことをするようになったんでございましょうか」何不自由なく欲しいものは何でも与えていたという。「おあづけ」の味というものが全くない。彼の非行性

の原因是、まさにそこにあったといってよい。残念ながらこの頃の親には、そんなことさえわからなくなるまで、育ての心が忘れられてしまったのである。それはこのA少年の親ばかりではない。かなり一般的なムードではなかろうか。

B子は裏長屋といつてよいような、二世帯同居の家庭に生まれ育った、いわば雑草のような少女である。野性的なたぐましさと素朴さはあるようなものの、女の子らしい情緒は貧困で、立ち居振る舞いも荒っぽく、感情もすさんでいる。父親は大酒飲みで癖が悪く、乱暴をし子どもたちをもやたら殴る。父親が金をうちに入れないからという理由で、母親も下町の鉄工場に働きに出かけて留守がち。B子と弟の三郎は、幼いたときからプラプラ遊びまわるのが癖であった。両親のいさかいとか、同居のよその家族とときどきまきおこる立ちまわりのケンカに耐えられず、小学校時代にも何度も家出したことがある。中学へはほとんど最初から行かず、この頃は家出のときが多く、帰宅することが少ない。不良仲間に入り、早くから性関係をもち、いよいよ気持もすさんできた。今度の事件も、そうした仲間と一緒にやつたことで警察の調べをうけることになったのである。

普通の家庭、つまり子どもの教育のことを大事に考える親のものでは、B子のような場合はあまり多くないことであろう。しかしどんな地域の小学校にもそれに似たような子どもが何人かはい

るもので、学校教育のわくからはみ出し、人にうとまれ、やがて脱落していくことが多い。

しかし今日何よりも注意すべきはA少年のようなタイプである。子ども本位に考え、豊かに物をととのえ、親は一生懸命子どものことを考え苦労したつもりで、実は丹精こめて愛する子どもを性格の弱い、非行にも脆弱な人間に仕立てているようなものである。

二 子どもは生命である

子どもというものは、輝かしい、たくましい生命をもつて生まれ、それぞれの持味を發揮して伸びようとしてやまぬものである。家庭において生命はすぐまれ、そこを温床として育つ。それには保育する者（とりわけ母親）の並々ならぬ丹精が必要である。そして自ら生きる力を持ち、いろいろのことに抵抗感をもちながら、それに耐え、それをのりこえて成長する。すばらしい成長力とエネルギーと適応能力をもつていて。

その自然にそなわったいのちの力を信じ、尊重しなければならない。その生命の前に敬虔な心をもつ者だけが、人の子を育てる者としての資格があるのだといえよう。大きな自然からそなわった子どもの心を知らず、それを無視する親がいかに多いことであろう。子どもについていつもイライラ、ハラハラして、あれやこ

れや手をかけている親が、多くの場合、子どもの生命力の尊重を忘れ、わざと子どもを弱くし育て方を誤っている。育児の根本は、その自然の生命力と適応の力をおおらかに信じ、無理をしないことである。いろいろ困った子どもの問題をかかえた親に接し、また大変すこやかに子ども育てあげた親を見ると、おのずからこの理を体得しているかいないかによるのである。

小児科医の権威遠城寺宗徳博士がよく言われることであるが、幼子のもつ生きる力を信じ、おおらかな謙遜な気持で子どもに接するのが、強い子を育てる秘訣なのである。たとえば母乳で育った子は、見かけは大きくなくとも、いきいきとして免疫その他の抵抗力がつよく、暑さ寒さなどへの適応力が、人工栄養の子どもより強い。それなのに母乳栄養の子が年々減っているのは、「幼子の心中にもついている力を信じない母親、その他周囲のものの心がけによる」のである。そしてこんなことも言つておられる。

「だいたい母乳は、生まれたときには子どもが吸いついて吸えば与えられるという準備状態にあるもので、吸わなければ出ないのです。子どもが根気よく吸いついていく間に、二十日、一ヶ月たちますと、はじめてたくさん出るようになるわけです。したがって一週間以内に乳が足りないと、いのちの命は当たり前のことです。それをちょっと出がわるいからといっては、「だめだ、こんなことではやせてしまう」とおばあさんの声援なども加わつ

て、大きいそぎでミルクを買ってきて飲ませる。そうしますと、子どもは出にくいお母さんの乳を根気よく吸うよりも、樂な穴の大きいミルクのほうに吸いついてしまって、出るべき母乳はますます出なくなつていく。それが母乳栄養減少の大きな原因だと思うのです。よく「親の心子知らず」と申しますが、「子の心親知らず」がたくさんあるのでして、子をして言わしむるならば、おそらく「お母さんたち、あわてなさるな、もう少し私は吸わせてくれ、吸い出してくれる」と言うであります。

こうした子どもの内にある母の乳房を吸つて生存しよう、成長しようという、生きる力を私たちは信じ、また育てていくことが必要ではないかと思うのです」

子どもはみずみずしく生きているものであるが、必ず保育する者の愛情ふかいまなざしや世話や愛撫に反応してすくすく伸びるものである。生き生きしたいのちは、それにふさわしい育てるものの心との接触を望んでいる。幼児をあやしている母と幼児の姿を見ると、そのことがよくわかる。母親は一心に子どもを見つめ、「イナナイナバーバー」とあやす。その目の輝き、明るい口調や語感、何よりもそのときのお母さんはればれした幸福感に満ちた気持に反応して、子どもは、ニコニコと笑い、ときには笑いこけ、すばらしい表情を示す。そうしたことのくりかえしによつて、子どもの情緒は豊かに育ち、表情やしぐさも生き生きとす

る。それと反対に、母親のそういう愛撫をうけず、「イナナイナバーバー」はあっても、心のない言葉だけだったら、子どもの情緒のリズムは反応せず、笑いもしないであろう。育つ者の心とその要求が満たされず、やがて心身感情ともども育つうえに障害をもたらすことになる。結婚してやがて子どもの生まれた若い母親が赤ちゃんを抱いて訪ねて来るときの、母子の「イナナイナバーバー」のようすで、その子の何年か先を予測することさえできるのである。

子どもの発達と育てる心

人間（子ども）は、肉体と精神との結合による複雑な生きものである。肉体に成長があり、幼少時の成長はまことに驚くべきものであるが、その心の成長発展もまた驚くべきものである。その肉体と心とはバラバラなものではなく、微妙に結合し、相関的であり一如であるといつてよい。育児とか教育は、その適切な相関的成长をはかることである。

児童心理学の大家アノールド・ゲゼル博士は言っている。

「子どもは長い人類の歴史を、圧縮されたかたちでひととおり通らねばならない。これは時間のかかる仕事である。彼の生理の機構は、その全力を使ひこなして、祖先からずっと伝えられて來た人類の縦糸を、自分で織りなしていくかなくてはならな

い。彼の複雑微妙にからんだ神經組織全体を使って、ながい人

類の歴史を、人間にふさわしく受けつがなくてはならない」

人類の歴史をかりに十五万年とすれば、子どもは十五歳ぐらいになるまでに、ちょうど一万年を一年の間に経験しながら成長するわけである。本当に驚くべきほど複雑な豊富な経験をするのである。

ある。この論理を胎児の発達にあてはめると、母の胎内に赤ちゃんが宿つてから生まれるまでの十ヶ月は、まさに微生物が人類に変化（進化）し、成長した十億年に近い年月と同様の変化と成長だと言えよう。それは絶えず、進化し成長してやまない力を内に秘めた畏るべき生命の展开である。

誕生してから一年くらいでは、まだ胎児期と独立児との両者の重なりのようである。つまり生まれて数ヶ月は、まだ独立の個体としての資格がないほど母親依存で、胎内の延長のようなところがある。スイスの学者ポルトマンの説によると、人間は普通の動物どちがってすぐおとなになるにはながい年月がかかるが、生後一年は生理的にいえば実は胎内にいるはずの状態である。つまり人間は一年早く生まれたわけだという。いわゆる「人類早産説」である。何のために早産するかというと、人間らしい情緒やしぐさ一人間性を学習するためだというのである。なかなかおもしろい考え方である。たしかに人間は生まれてから何よりも母親のひざもとで保護され愛撫されつつ、人間的な文化条件の中で人

間になる学習をするものである。そのことを新生児は激しく求めることを知ること、そして人間によって人間らしく育てられてはじめて人間になるのだといえよう。一歳時を過ぎるまでの乳幼時の保育がいかに大切であるか、このことによつてもわかるのである。

次の大きな成長の峠は、三歳時である。「三つ子の魂百まで」という諺のように、人間の基本的なものは、おおよそこの頃に培われる。したがつてこの頃にその心身の諸機能を思いきり伸ばすことが必要である。親のひざもとだけではなく、子どもの活動範囲は広くなり、いろいろな生活経験の中で、終生にわたつて大切なことをたくさん学びとるのである。すべつたりころんやりヤンチャ遊びをしながら運動機能が発達し、身ごなしをおぼえ、創造性や抑止力が著しく育つ。感情も新春の若芽のように萌え出し、自分をつつむ外界に対してはげしくゆれ動き、飛躍間に成長する。

第三の峠は、六歳時である。子どもの行動範囲はいよいよ広く、家の外遊びに夢中になり、友だち仲間との集団生活を求める。目的な冒險心、自己抑制心、そして次第に自己中心から脱却するようになる。この頃の伸びゆく力育つ力は外界としての物や人や親子兄弟の関係、遊び仲間や先生との関係などは、その後の人格形成とか行動の傾向に重大な影響をもつてゐる。グリュック博士

夫妻は、多年の研究の結果、六歳時の家庭内の人間関係（父による訓育、母による監護、父母の愛情、家族の結合など）や周囲との関係などから、将来非行に陥る者とそうでない者とを振りわけることができるときさえ言っている。たしかにわれわれの臨床の経験からも、問題の少年とそうでない者とのわかれ道の一つが六歳の頃にあるといえそうである。

この峠をこえて第二の誕生期と呼ばれる思春期に至る時代はまさに家庭と学校と両方にまたがって成長し、教育される。親だけでなく先生、むしろ親よりも先生、そして友だちが大切なときである。その友だちもやがて「彼、彼女」と関心が特定の異性に向かう。育つ者の心は、他なる者との深いつながりを求めるのである。育つ者の心は、まずその内的要求を正しく知り、人と人との出会いの転機というものを適確に見て、その者と出会う己が何であるか、どうあるべきかを謙虚に自己省察すべきものである。教育とは、そういう出会いの中に營まれる意識的あるいは無意識的な人間育成の營みにはかならない。

四 むすびに

「育ての心」ということをつねに説かれ、それこそ保育・教育の根本だとされたのは、外ならぬ故倉橋惣三先生である。日本の保育学は、その先生のたがやされた土壤の上に展開されたのであ

る。その後の保育の学を一言にして言えば、科学化と技術化ということであろう。しかしその科学と技術が果たしてまことの人の育成の学、正しく創造的な人間の学となつてゐるであろうか。ことに保育と教育の実際がこれでいいのであるか。客観的な条件や社会環境の問題ももちろんあるが、何よりも保育する者が育つ者の心を深く知らず、育てる者の心を失つてゐるようである。その結果は、科学の名の下に驚くべき非科学的育児が横行し、問題児はむしろそこから作られている向きが少なくないとさえ言えるのである。もちろん倉橋先生の三十年前説かれたことがすべてそのまま現在適用されるというわけではない。どんなすぐれた人にも言えるように、先生もまた時代の子であり、歴史的条件を背景としておられたであろう。批判されしかるべきところも少なくないであろう。しかしその根底とされた「育ての心」は今日もまた大切であり、今日のような時代にこそ、忘れてならない精神、なのである。